

2020年9月6日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 11 章 28～44 節

説教題：主イエスの信仰に倣う

7月のK姉のご葬儀で、私は「天国の希望」をお語り出来る幸いを改めて思いました。ご遺族の方々に、参列された方々に、確信をもって「K姉は天国で生きておられますよ」と語ることが出来る、その根拠は何かといえば、イエス様の言葉です。聖書の言葉です。その中でも最も力強く響いて来るのが「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んで生きるのです」(ヨハネ 11:25)の言葉です。この言葉を握る時、私達は、死の大きな悲しみの向こうに光を見ることが出来るのです。今「ラザロのよみがえり」の箇所を学んでいます、今日の箇所は、このイエス様の言葉に、力強い証言を与える、そのような箇所になります。

さて、私達もいつか地上の死を迎えます。誰も避けることは出来ません。でも私達は、死は「天国への入り口」だと信じています。そこから本当の喜びの生が始まるのです。CS ルイスは「先に行けば行くほど、喜びが増すような世界」と表現しています。その意味では、地上の生涯というのは、天の生涯への備えの期間だと言えます。この期間の大切なテーマは、少しでもイエス様に似た者に変えられることではないかと思えます。申し上げた通り、今日の箇所は「ラザロのよみがえり」を扱う箇所ですが、この箇所は、私達が倣うべき、学ぶべき、真似ぶべき、イエス様の信仰の姿を教える箇所でもあります。そこで今朝はここから、私達が倣いたい、真似びたい、イエス様の信仰の姿勢、3つを学んで行きたいと思えます。

1：罪と向き合う

前回は、ベタニヤの村はずれまでやって来られたイエス様を、マルタが迎え、そのマルタにイエス様が「わたしを信じる者は、死んでも生きる…」(25)と語られたという話でした。マルタは、イエス様との交わりを通して、ラザロのことも何もかも全部、イエス様に任せようという思いになったと思います。彼女は、妹のマリヤを呼びに家に帰ります。イエス様が呼んでおられると聞いて、マリヤは家を出て行きます。この時、この姉妹の家には弔問客が沢山来ていました。当時は、最初の1週間、遺族(特に女性)は、出来るだけ機会を作って墓に泣きに行くのが習慣でした。マリヤが出かけるのを見ると、弔問客は、彼女が墓に泣きに行くのかと思って一緒に泣くためについて行きます。しかしマリヤは、墓には行かず、イエス様のおられる所に来て、イエス様の足下にくずおれて泣き出します。その様子を見て、ついて来た人達もイエス様の前で同じように泣き出しました。ところが、それを見たイエス様は、「霊の憤りを覚えて、心に動揺を感じ(られる)」(33)のです。38節にもイエス様が「心の内に憤りを覚え…」(38)とあります。この「憤りを覚え」という言葉は、「怒り」を表す言葉のようです。ですから、ある人は、ここを「イエスの心は、

怒りで震え、悲しみに締め付けられた」と訳します。「悲しみに締め付けられた」の方は分かりますが、「怒りで震え」というのはどういうことでしょうか。

色々な考え方があるところですが、しかし、ここでイエスは「死」そのものについて怒っておられるのではないのでしょうか。なぜなら、イエス様の目の前で泣いているマリヤを完全に打ちのめしているのは、「死」という現実です。ラザロの「死」が、マリヤを打ちのめし、マリヤの心を、また大勢の人の心を支配し、彼らに一切の希望を見ることが出来ないようにしているのです。マリヤも、人々も、心の中で既に「ラザロは手の届かないところに行ってしまった、『死』の支配の下に入ってしまった」と彼を葬り去っているのです。イエス様から「わたしを信じる者は、死んでも生きる…」(25)と言われたマルタも、イエス様が「墓を開けなさい」と言われた時、「主よ、もう臭くなっておりましょう」(39)と言って諦めています。もちろん、「死」を前にして私達は無力です。「死」の力は圧倒的です。死んだ人を前にして、私達は何も出来ません。ですから、人々の心を「死」という現実が支配して、悲しませ、ここでマリヤを悲しみに閉じ込めているのです。

確かに人は皆、死んで行きます。しかし聖書的に言えば「人は死ぬのが当たりまえ」ではありません。聖書に「ひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がった…」(ローマ 5:12)と書いてあります。初めの人アダムに罪を犯させたのは悪の力、サタンの力です。その結果、「死」が入って来たとすれば、「死」はサタンの支配する領域だと言うことができるのではないのでしょうか。イエス様が「彼をどこに置きましたか」(34)と言われた時、人々は「来てご覧下さい」(35)と言いました。丁寧な言葉です。しかし内容的には「来て、『死』の現実を見てみろ」ということです。「あなたは神の子であるかも知れないが、どうだ、『死』の前には、人間の希望も何も吹っ飛んでしまうのだ。マリヤは立ち上がることも出来ないし、お前だって何も出来ないだろう」。イエス様は、くずおれて泣いている彼女たちの上で、悪の力が、そのように勝ち誇っているのをご覧になったのではないのでしょうか。イエス様の怒りとは、その悪の力に対する怒りではなかったのでしょうか。イエス様は、私達をダメにしようとしているものに対して怒っておられるのではないのでしょうか。

何を教えられるのでしょうか。「死」が罪の結果として起こって来るということであれば、一番の問題は、「死」をどうこう考えるより前に、まずこの罪の問題を考えることではないのでしょうか。私達の中にある、私達を「死」へ導く罪の問題をしっかりと見つめ、認め、そして罪の問題の解決を願い、そして「あなたの罪の問題の解決のために、私は十字架についた」と言われるイエス・キリストの十字架による罪の赦しを受け取ることこそ、大切ではないのでしょうか。「キリスト教は、『罪、罪…』と言うから暗い」と言われるそうです。しかし私達は、例えば「風邪をひいた」と思うから風邪薬を飲もうとするのです。「風邪なんかひいていない、私は元気だ」と思っている人は、風邪薬なんか必要ともしなし、飲もうともしないのです。私達が自分の中に巣くっ

ている罪を認めなければ、「罪の赦し」を願うこともないし、受け取ろうともしなし、だから何よりも大切な、イエス様から「罪の赦し」を受け取るという関係が成立しないのです。私は、自分の中にある罪を真剣に見つめる必要を教えられます。そして「死」によって私達を悲しみに閉じ込める、私達に勝ち誇る、悪に勝利することが大切です。悪の力に向かって「悪よ、退け、私には、イエス様の十字架の赦しがあるのだ」と言えるようにしたいのです。

しかし、それだけでなく、イエス様が私達を滅ぼそうとするものに対して怒られた、ということに目を向ける必要も感じます。イエス様は、私達を「死」の支配に閉じ込めようとするもの、私達をくずおれさせようとするものに対して、怒られました。でも、どうでしょうか。肝心の私達の方は、私達の罪に対して、あるいは、私達の罪性に巧妙に働きかけてくる悪の力に対して、どれほどの怒りを持っているのでしょうか。世にある限り、いつも罪の誘惑と悪の誘いが色々な形でやって来ます。もちろん、自分の力だけで悪の力に勝とうとしても、それは出来ません。必ず失敗するでしょう。しかし「我らを試みに遭わせず、悪より救い出だしたまえ」(マタイ 6:13)という祈りを、心を込めて祈ることは出来ます。悪の力に対して敏感でありたいと思います。

2：神の栄光を求める

イエス様は、ラザロの墓に来られました。ラザロは体を布で巻かれて、墓の中に横たえられていたでしょう。イエス様は「石を取りのけなさい」(39)と言われました。マルタは止めました、イエス様は「もし…信じるなら…神の栄光を見る…と言ったではありませんか」(40)と言われて、祈られます。「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。しかしわたしは、回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、こう申したのです」(42)。なぜこの祈りをされたのか。イエス様は、もちろんラザロのよみがえりを願い求めておられるのですが、同時に求められたことは、この奇跡的な出来事によって、人々が、イエス様がこのことをした、と思うことがないように、そうではなくて、神様がイエス様を通してこのことを為さったということが良く分かるように、ということです。つまりイエスは、この祈りを通して神の栄光が現れることを願っておられるのです。

1646年、イギリスで作られた「ウエストミンスター教理問答」は「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」と告白します。「神の栄光を表す」と「神を喜ぶ」ことを、人の目的とします。私達は「神を喜ぶ」ことはします。神様がおられること、どんな時にも神様の中に希望を見て行けること、そしてこれまで与えられた恵みを思う時、神を喜び、感謝します。しかし一方で「神の栄光を表す」と言うことについて、どれほどの重きを置いているのでしょうか。イエス様は、神の栄光を求められたのです。私達もそうありたいと思うのです。

第二次大戦中のユダヤ人強制収容所での話です。ビクトル・フランクルという人が、どうして

も自殺したいという人達を思いとどまらせるために話をして欲しい、と頼まれて、こんな話をします。「私達の人生は、これからの何日間かの苦しみの後に、この収容所で終わるだろう。それなら、その死までの何日間かの人生に一体何の意味があるのか。どうせ死ぬならそんな何日間かの無意味な苦しみはやめにして、一刻も早く死んだ方がいいと考えている人達があなたがたの中にいることを私は知っている。またそこまではいかないまでも、自暴自棄になり、絶望的になっている人も多いただろ。しかしそれは、あなた達が、死ぬまでの苦しみの人生の中から、何をまだ得ることができるか、というふうに発想しているからいけないのだ。そうではない、視点を転換することが必要なのだ。これからの苦しみの人生から何を期待出来るか、という発想をやめて、人生がこれからのあなた達の生涯に何を期待しているのか、という視点に立つことが肝要なのだ…この視点の転換を出来た人が、死に向かつての苦しみの中にも、なおかつその意味を見つめることが出来る人であり、その苦しみを前向きに背負って生きて行くことの出来る人なのだ」。彼が言う「私達の人生が私達に何を期待しているか」という言葉は、言い換えれば、「神様が私達に何を期待しておられるか」と言うことが出来ると思います。もし私達が「神様は私に何を願っておられるだろうか」ということに本気になって目を向けようとする時、私達も神の栄光を表すような信仰生活に、少しでも踏み出せるのではないのでしょうか。それは結果として、私達に生きる意味を与え、使命を与え、生きる張りを与えて行くのです。田原米子という方は、お母さんを亡くし、虚しさに捕らえられて電車に飛び込んだのですが、イエス様に救われ、「生きていることは素晴らしい」と証しするようになった方です。彼女は、朝起きて、両足の義足をつける時に祈りました。「神様、今日、あなたが私に出会わせて下さる方のために、私が生きることが出来るように導いて下さい」。その祈り、信仰によって、彼女自身が生き生きと生きて行かれたようです。彼女は、15年前に召天されました。私達もやがて神の前に立つ時が来ます。「よくやった、良い忠実なしもべだ」(マタイ 25:21)。そう言って頂けるような生き方を携えて、神の前に出たいと願うことです。

3：神の力を信じる

イエスは、墓に向かつて声をかけられました。「ラザロよ、出て来なさい」(43)。すると、死後4日も経って、ユダヤ人の常識でも生き返る望みが全くなかったラザロが、布に包まれたまま墓から出て来たのです。そこにいた人々は、どんなに驚いたのでしょうか。マルタやマリヤは、どれほど嬉しかったのでしょうか。しかし、ラザロはこの後、どうなったのでしょうか。ベタニヤは、現在、ラザロに因んで「アザリヤ」と呼ばれているそうですが、そこには「ラザロの墓」があるそうです。ラザロは、何十年後でしょうか、また死んだのです。ラザロは、結局は死んだ。ではなぜ、イエス様はこの時、ラザロをよみがえらせるということをしたのでしょうか。

確かにラザロは死にました。でも、またラザロが死ぬ時、マリヤやマルタが生きていたら、2

度目にラザロを見送った時の気持ちはどうだったのでしょうか。恐らく1度目と2度目とでは、彼らの気持ちは大きく違ったと思います。彼らの心の中には「わたしを信じる者は、死んでも生きる…」(25)と言われ、実際にラザロを死の世界から命の世界に移した方がおられたはずです。そして今度は、生き返っても、また死んで行く世界によみがえるのではなく、イエス様の待っておられる永遠の国によみがえるという希望が、彼らの中にあつたのではないのでしょうか。それだけではない、「わたしを信じる者は、死んでも生きる…」(25)という言葉は後の時代に聞く私達にとって、ラザロのよみがえりは、その言葉の力強いシンボルとなる、そのために起こったのです。だからこそ、私達は「ラザロのよみがえり」を通して、今も「死んでもよみがえる」、「死んでもよみがえらせて下さる」神の力に、思いを向けることが出来るのです。

「天路歷程」という本があります。イギリス人のジョン・バニヤンという人が書いて、1678年に出版された本です。キリスト教世界では、聖書の次に読まれていると言われます。大筋は、「クリスチャン」という名前の主人公が、魂の救いを求めて家を出て、天の都を目指して旅をする話です。途中、色々な困難に遭い、誘惑に遭い、失敗もしながら旅を続けます。そして彼は、ついに天の都の門に辿り着きますが、その時、天の都に辿り着いた「クリスチャン」を無数の天使が出迎えてこう言います。「ここに、世にいた時に主イエスを愛し、主のためにあらゆるものを捨てた人がいます」。そして天の都に大歓声が上がります。また天の都の門には、次のように書いてありました。「王を喜ばせるために生きた人々は幸いである。彼らはこの門を通して天の都に入る事が出来る」。そして彼は、金のように光り輝く衣を着せられ、頭には冠が授けられるのです。物語は、ここでバニヤンが目を覚まして、それが夢だったということが分かったところで終わるのですが、しかしバニヤンは、この話を通して、天国の希望を、彼の中の現実として語ったのです。苦難の中で、最後までこの希望に生かされて行ったのです。現代の高名な学者は、信仰を持ち、人生を変えられ、やがて重病で入院して、もう助からないということが分かった時、見舞いに来た人に「僕は行く所が分かっているから心配はいらないけど…あなたは大丈夫ですか」と、却って見舞いに来た人のことを心配して尋ねた、というのです。彼も、ラザロ、マルタ、マリヤ、またジョン・バニヤンと同じ希望に最後まで生かされ、天に凱旋して行ったのです。

ラザロのよみがえりは、「死」を前にしてくずおれるしかない私達に、「死」は終わりではなく、「死」の支配から解き放ち、命へ導くことの出来るお方がおられる、「死から命へ」、それは作り話や、単なる希望ではない、現実のことなのだ、ということを教えるための奇跡なのです。しかし、イエス様は神の子だから、ラザロをよみがえらせることが出来たのでしょうか。そう言っても良いかも知れません。しかしイエス様は、神に祈っておられます。先に申しあげた通り、この奇跡をなされたのは神様です。この奇跡は「答えられた祈り」なのです。そして、イエス様は、神様が必ずこのことをして下さると知っておられたのではなくて、信じ切られたのだと思います。私達は、もちろんイエス様のような確かな信仰を持つことは出来ませんが、しかし、ラザロのよみ

がえりという歴史的な事件によって、私達に働く神様の力に希望を持つことが出来るようになりました。「死」を恐れなくて良い、漠然とそのことを信じるのではない、本気でそのことを、神の力を信じて、だからこそ、天の御国に向かって、地上の歩みを進めたいと願うのです。

最後に

イエス様の信仰に倣いたい、今日 3 つのことを申し上げました。「罪(悪)と向き合う」、「神の栄光を求める」「神の力を信じる」、少しでもイエス様に似た者に変えられることを目指して、天国への備えをしたいと思います。